News & Topics

第8回「日本編集制作大賞」決定!

AJEC創立30周年記念謝恩パーティ内で「第8回　日本編集制作大賞」の発表及び授賞式が行われ、最優秀作品であるグランプリには株式会社エフビーアイ・コミュニケーションズ『Going the Extra Mile -UD Trucks Stories』が選ばれました。

AJEC グランプリ

株式会社エフビーアイ・コミュニケーションズ

『Going the Extra Mile - UD Trucks Stories』

（UDトラックス株式会社／発行）

AJEC 一般書部門賞

株式会社キャデック

『世の中のふしぎ400』

（株式会社ナツメ社／発行）

AJEC 教材部門賞

株式会社ブランディット

『キッズレッスン　おふろシリーズ』

（株式会社JTBパブリッシング／発行）

AJEC 企業出版部門賞

株式会社エディット

『やさいだいすき』

（タキイ種苗株式会社／発行）

祝・協会創立30周年

(株)アーク・コミュニケーションズ	(株)アート工房	(株)アッシュ	(株)アラレス	(株)エイティエイト
(株)エディット	(株)オフィス・サンタ	(株)カイト	(有)カラーズ・ファクトリー	(株)カルチャー・プロ
(株)桂樹社グループ	(株)シナップス	(株)青丹社	(株)説話社	テープリライト(株)
(株)風讃社	(株)プランディット	(株)フロンテア	(有)ムーブ	(株)ロム・インターナショナル

（敬称略　50音順）

EDITORIAL MAGIC

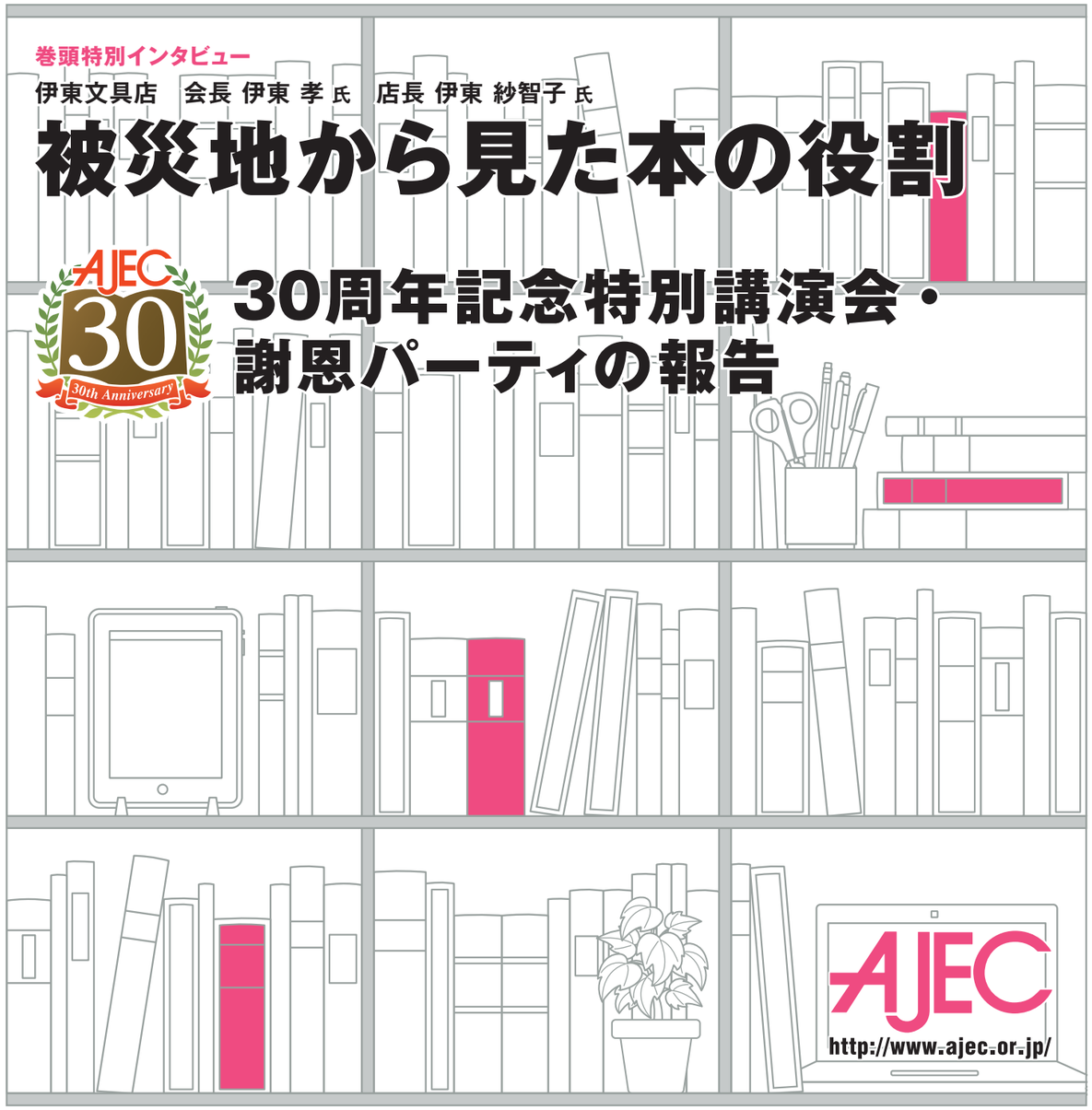
2013.12.30 TOTALING NO.112
No.15

巻頭特別インタビュー

伊東文具店　会長 伊東 孝 氏　店長 伊東 紗智子 氏

被災地から見た本の役割

30周年記念特別講演会・謝恩パーティの報告



2013年12月号　No.15（通算112号）　発行日：2013年12月30日（月）　発行：一般社団法人 日本編集制作協会　編集：日本編集制作協会広報委員会

Vol.15 INTERVIEW

被災地から見た本の役割

伊東文具店　会長 伊東 孝 氏 Takashi Ito　店長 伊東 紗智子 氏 Sachiko Ito

街の本屋さんはその土地の暮らしと直結している。
本屋さんを見れば、地元の方々がどんな生活をしているかが少なからず見えてくるはずだ。
今号では、東日本大震災から2年9カ月過ぎた被災地の本屋さんを訪ねてみた。
被災地の中でも壊滅的被害を受けた陸前高田市。
震災前も市内で唯一の本屋さんであり、震災後は、仮設店舗で営業を再開した「伊東文具店」。
伊東文具店の会長 伊東孝さん（60歳）と孝さんの次女であり、店長を務める紗智子さん（32歳）に率直な疑問をぶつけてみた。
「被災地における本の役割って、何ですか？」

陸前高田市 Rikuzentakata

陸前高田市は、三陸海岸の南部に位置し、砂洲に高田松原と呼ばれる7万本の松林で有名な、カキ・ホタテ・ホヤなどの養殖漁業で栄えた町。海岸からなだらかにつづく低地に発展した市街地中心部を東日本大震災の大津波が直撃。市役所・図書館・市民体育館・商店街・ショッピングセンター・住宅街すべてが海にのみこまれ、市内唯一の本屋「伊東文具店」も流された。被害状況は、死者1556名、行方不明者215名、倒壊家屋3341棟（2013年11月30日現在）。被害は最も甚大だった。現在は市街中心部の機能を隣町の竹駒町に移し、飲食店も再開されている。

町がまるごと海に沈んだ陸前高田の市街地

――初めて震災後の陸前高田を訪れたのですが、住居がなくなるという部分的被害ではなく、市街地まるごとが津波に流されて広大な更地と化した光景を目の当たりにして絶句しました。本当にここに街があったのかと。とても想像しがたい状況です。伊東文具店さんも市街地に店を構えていたんでしょうか。

会長：はい。震災時は、文房具店の本店は駅前通りという大きな通りに構えていて、書籍部門は「ブックランドいとう」という名称で海岸近くのショッピングセンターで営業をしていました。その日、私は本店で仕事をしていたんですけれど、ショッピングセンターの理事をしていましたので、地震が起きてすぐ「ブックランドいとう」に駆けつけて従業員たちを避難誘導し、高台に逃げたんです。紗智子も「ブックランドいとう」で働いていたんですが、お年寄りのお客さまを避難させようと別行動になってしまって、離ればなれになりました。再会できたのは次の日です。この津波で社長を務めていた弟夫婦とその息子、そして従業員が亡くなりました。

――被害状況を知ったのはいつ頃ですか？

会長：私は、高台から街全体がすっぽりと海に覆われて、沈んでしまった状況を見ていましたから、その時点でわかっていました。それで、本店で働いていた弟夫婦と長男が戻ってきませんでしたので、津波にのみこまれたということも次の日にはわかっていました。弟が本店を片付けてシャッターを閉めている姿は目撃されていて、それが最期になります。

――震災前は、街のよくある本屋さんだったんですよね。

会長：そうです。子どもからお年寄りまで地元の人が通う本屋でした。

――そこからこれまでの生活が一転するわけですが、仮設店舗でお店を再開は早かったと伺っています。いつ頃再開したのでしょうか。

会長：文房具店の営業は2011年4月15日に再開しました。震災があった当時は、「お店のことをどうしようか」「商売をどうしようか」ということは、全然頭に浮かんできませんでした。あったのは「なにもかもなくなったなぁ」ということと、次の日から弟家族が戻ってこないということがわかりましたので、（遺体を）探すことでいっぱいだったのです。しかも、その状況の中で生活をしていかなければなかったので、本当にそれどころではなかったんです。最初の頃は、いろんな方たちに「（店を）再開しよう」と言われましたが、お店を再開したとしても、お客さまが物を買いに来るということすらないだろうと思っていました。けれど、弟らが見つかり、学校の新学期が4月20日に始まることが決まり、少しずつ気持ちが変わっていったのです。新学期が始まっても子どもたちが文房具を買うところがなかったので、学校が始まる前にオープンさせる必要があったんです。取引先の問屋さんなどいろんな方たちの後押しと援助があって、仮設店舗をオープンすることができました。

――その時点では文房具のみで書籍はまだですよね。書籍部門の再開の経緯は？

会長：最初は12坪の仮設店舗でのスタートだったので、狭くて書籍を置けるスペースがなかったんです。震災関連の写真集を置くくらいで。お客さまにとっては「伊東文具店」というと文具と本屋というイメージがあったので「本は置かないんですか？」「いつから本屋は始めるんですか？」と言われ続けました。こういう状況だからなのか、こういう状況にもかかわらずなのかわかりませんけれども、ひと月経って「日常」とは言えませんが、少しずつ「平常」を取り戻しつつあったのです。「好きな本や雑誌を読みたい」「震災前は毎月購読していたけれど、どうなるのか」という声をたくさんいただきました。大変嬉しいことです。できるだけご要望に応えようとプレハブを建てようかと考えもしましたが、店舗の土地を借りていた分、なかなかスペースがとれなくて……。そこで別の場所を探して、2011年12月15日に書籍部門をオープンすることになったのです。

――その時の光景を覚えていますか。

紗智子店長（以下店長）：よく覚えています。震災前のお店の雰囲気が戻ったような気がしました。とても懐かしいような、なんとも言えない気持ちになりました。懐かしさがこみ上げてきて、お店に入ってみた雰囲気に感激しました。なんだか、店内が以前に比べて明るくなったような気がして。震災前の本屋は100坪あったので、3分の1の規模しかないんですけど、そう感じました。

――お客さまの反応はいかがでしたか。

店長：お客さまも私と同じ気持ちだったと思います。店内に入ると本がたくさん並んでいたので、「わぁ!」という歓声が上がりました。「ありがとね」「やっぱり本はいいね」とたくさんのお客さまにお声がけをしてもらいました。

――地元の方々にとって震災前の街の面影を感じられる場所になったんですね。オープン当初の売行きはいかがでしたか。

会長：震災関連の写真集が売れました。みなさん、一人10冊とか、何種類もの写真集をまとめ買いされる方もいて、懐かしさもあったでしょうし、高田以外のご家族に

送ったり、支援してくれた方々にお礼として送ったりと、用途はさまざまです。高田は街ごとなくなってしまったので、昔の面影がありません。震災前の街並みを記憶だけでなく写真を通じて残しておきたいという気持ちがあったんだと思います。

店長：震災関連の写真集は一日100冊以上も売れて入れてもすぐなくなりました。特に売行きがよかったのが、陸前高田市のタクミ印刷が発行した『未来へ伝えたい陸前高田』という写真集です。この本は、震災でなくなってしまった街並みが載っているんですが、全部地元の方々が撮った写真で構成されているんですね。それを集めて一冊にした本なんです。あとは、なかだえりさんの『奇跡の一本松』という絵本や「千の風になって」の翻訳・作曲で有名な新井満さんの写真詩集『希望の木』も売れました。家族を亡くした人たちが多いので、そうした人たちへの思いを伝えた本が必要とされていました。

——その状況はどれくらい続きましたか。

店長：震災から一年以上は続きましたね。そろそろ落ち着くかなと思って仕入れを止めようかなと思っていても関係なくて。あとは、一時、仏教の本など“心のケア”をテーマにした本も売れていきましたが、今はだいぶ落ち着いています。

震災で再認識した本屋さんの役割

——陸前高田では今も仮設住宅に住んでいらっしゃる方が多いですが、こうした仮設住宅に住む方はどのような本を求めているのでしょうか。

店長：仮設住宅に住むからとかはあまり関係なくて、自分の好きな作家の本だったり、マンガだったり、趣味の本をよくまとめ買いされています。「置く場所がないけどね」とおっしゃりながらも本をまとめ買いする姿を見て、部屋は狭いけれど、自分の好きな本にはお金を惜しみたくないんだなと思いました。

——仮設住宅にお住まいの方に暮らしぶりをたずねると、薄い壁で隣り合わせの生活で、夜シャワーを浴びることも憚れるとお話を伺いました。ラーメンをすする音にも気を遣わなければいけないとか。その意味では本は自分だけの世界にこもれるアイテムなので、少しでも気がまぎれるのかなと感じましたが。

店長：そうですね。私自身は震災後にアパートを借りたので仮設の大変さをわかっているわけではありませんが、仮設で過ごすご年配の方は、震災前よりも本を読んだりする時間が増えているかもしれません。

会長：店舗自体は震災前よりも小さいので、売上げは減っていますが、相対的に見れば、以前より本の売行きはいいかもしれないです。

——本が置くスペースがない中で本を買っていただけるのは嬉しいことですね。震災後、お客さまが求める本が変わったなと感じたことはありますか?

店長：ある日、仮設にお住まいの方が海外旅行の本を手にして「本当に行くわけではないんだけどね」と言いながらも本を購入されたことがありました。私も「見るだけでも楽しいですよね」とお声がけをしたのですが、本を読むことで気分が変わるんだろうなと。そういう本の役割もあるんだと思いました。

——実は店内を拝見した第一印象が「明るい」だったんです。もっと心のケアや生き方をテーマにした本などが平積みされていると思っていましたから。手芸や編み物の本も充実していますよね。

店長：お客さまは余暇とか楽しみを求めて本をさがしていらっしゃるんだと思います。心のケアのために本を読むとかではなくて、なんというか、本って眺めているだけでも楽しいじゃないですか。手芸は作ったからどうというわけではないですけれど、作ったものを私たちに見せにくるお客さまもいらっしゃる。そういうやりとりが楽しいです。

——大変な状況だからこそ、何気ないやりとりはありがたいですね。

店長：私自身、お客さまには本当に元気づけられています。具体的にはなかなか言えないんですけど、お客さまが本の内容を教えてくれたりすることもあって、そうした時のお客さまの顔ってとてもいい表情なんですね。見ているだけでこちらも嬉しくなります。

——その意味では震災前と震災後で一番変わったことは接客なのかもしれませんね。

会長：そうですね。仮設住まいになって、あまり人と会話することがない方も多くなりましたから、お店に寄ると一生懸命お話ししてくださいます。震災前は常連のお客さまとの会話が多かったのですが、震災後はそうでないお客さまともレジを挟んで会話をするというのが多くなりました。みなさんお話をしたいんだと思います。別にこっちが意識して声をかけようとしているわけではないですが、コミュニケーションが増えました。震災前はレジにお客さまが並んでいたりして、会話をする余裕もなかったというのもありますけれど。

表紙は見ているだけでワクワクするもの

——ここに訪れるまで私自身もどのような距離感で被災地の方々と接すればよいのか、少し緊張していたんですが、構える必要はなかったなと。苦悩って個人的な経験が多いと思うんですが、これだけの規模で被災すると、個人的なものではなく、それを街全体で共有している。なおかつ現実に転がっている。だからこそ、私たちが本に求めるものは少し違ったものかもしれませんね。

二人：その通りだと思います。

店長：これは個人的な気持ちですけれど、ここは“被災地”と言われるので、地元の人以外は「大変だろう」と心配してくださいます。もちろん大変なことはたくさんありますが、今は今で面白いこともある。ここに来るとみなさん楽しい顔をしているんですよ。こんな仮設店舗ですけれど、飲食店やスーパーで買い物をするお客さまの顔は、楽しそうに見えるんです。買い物って楽しいじゃないですか。もちろん「悔しい」「悲しい」などの気持ちもありますよ。その中でも今の生活を楽しくしようとみなさん前向きなんです。趣味だったり、料理だったり、好きな作家だったり……。

——本を作っている側としては、一見関係のないような本もみなさんの役に立っていると思うと励みになります。

店長：自分もそうですけれど、本の表紙って見ているだけでワクワクするんです。料理の本も眺めているだけでも「やってみようかな」という気持ちになる。やる気が湧くんです。ファッション誌をパラパラと眺めるだけでも楽しいし、本の雰囲気に浸るだけでも、妄想するだけでも楽しいし、気分が変わるんです。

——陸前高田は今は散歩する場所もないですし、ドライブする場所もありません。その意味では、地元の人たちは本屋さんでウィンドウショッピングをしている感覚に近いかもしれませんね。

店長：そうだと思います。気分を変えるためにに来るというわけではないですし、「つらい」「悲しい」という気持ちを抱えてくるわけではないですが、たまたま用事があって、うちの店にふらりと立ち寄った時に、ちょっとでも、その間だけでも、楽しいと思えたらと。もしかしたら、また仮設に帰ると嫌な思いになるかもしれませんが、本屋にいる一瞬は楽しみに変えられたら。そんな本屋さんでありたいと思っています。

会長：今後は陸前高田の中心市街地をつくっていくわけですけれど、本当にゼロからのスタートですから。ようやく中心市街地の構想は決まったので、その中にショッピングセンターを再建し、仮設店舗ではなく、文房具店と書店も営業させていく予定です。まだ時間がかかりますが、みなさんには暖かく見守っていただければと思います。そして何もないところですが、機会があれば陸前高田に立ち寄って地元の人たちと交流してください。

Shop 伊東文具店

1961年に文房具店として創業後、1976年に市内唯一の書籍専門店を展開。東日本大震災により、文房具店とショッピングセンター「リプル」で営業をしていた書店「ブックランドいとう」が流される。震災後、仮設店舗第一号店として2011年4月15日に営業を再開し、同年12月15日に書籍部門もオープン。現在は、仮設店舗3号店として2012年10月から文房具・書籍・復興グッズを取り扱った混合店を展開している。

住所：〒029-2203　岩手県陸前高田市竹駒町字相川1-1／**営業時間：**9:00〜19:00
TEL：0192-54-4412／**URL：**http://www.yamajyu.info

30周年記念特別講演会・謝恩パーティの報告

日　　時：2013年10月23日（水）
会　　場：アルカディア市ヶ谷
　　私学会館6階　阿蘇の間
内　　容：第一部　特別講演会
　　16時00分～17時30分
　　第二部　謝恩パーティ
　　18時30分～20時30分
参加者数：第一部　160名
　　第二部　160名

去る2013年10月23日（水）、私学会館「アルカディア市ヶ谷」において開催された協会創立30周年記念特別講演会と謝恩パーティは、それぞれ160名の参加者を迎え、盛況のうちに幕を閉じました。ご来場の皆様、また各方面よりいただいた御厚情に深く感謝いたします。以下、それぞれの会の進行の模様をご報告いたします。

30周年記念特別講演会

16時より開催された30周年記念講演会は、柳井理事の司会進行で開会。主催者を代表する鈴木副理事長の挨拶に続いて講師の嵐山光三郎先生が登壇されました。演題は「これから　出版の進む道」。平凡社で『別冊・太陽』の編集長として活躍され、同社を退社後は仲間と共に設立した青人社で雑誌『DoLiVe 月刊ドリブ』を創刊。その後は作家として活躍されている嵐山先生の、豊富な経験に裏打ちされたお話は、聞く者の心をとらえて最後まで離しませんでした。

嵐山光三郎先生の講演

嵐山光三郎先生の講演

30周年記念謝恩パーティ

謝恩パーティは、まず酒井理事長の挨拶から始まりました。30周年を記念する特別なパーティの開会を告げる挨拶とあって高ぶる気持ちと緊張の中で始まった理事長の挨拶でしたが、話されるうちにしだいに柔らかく温かな感謝の気持ちが会場いっぱいに広がりました。

続いて来賓を代表して日本書籍出版協会（通称:書協）専務理事の中町英樹様よりご挨拶をいただき、その後、日本ペンクラブの事務局長である吉澤一成様の御発声で乾杯をいたしました。乾杯でホッと緊張の解けた会場に歓談の輪が広がりました。

歓談の後、さらに来賓の方々にご挨拶をいただきました。協会の一般書部会のお客様を代表してご挨拶いただいたのは株式会社新星出版社代表取締役社長の富永靖弘様、教材部門のお客様としてご挨拶いただいたのは、株式会社新学社代表取締役会長の中井武文様、企業出版部門のお客様代表として株式会社アサツー・ディ・ケイ統合ソリューションセンター役員補佐の近藤和正様より、それぞれご挨拶をいただきました。ご来賓の皆様からは、当協会に対する熱い期待のお言葉をいただき、会員一同さらに身を引き締めて業務に邁進する覚悟を新たにしました。

酒井理事長挨拶

日本書籍出版協会専務理事　中町英樹様

日本ペンクラブ事務局長　吉澤一成様

歓談の様子

（株）新星出版社代表取締役社長
富永靖弘様

（株）新学社代表取締役会長
中井武文様

（株）アサツー・ディ・ケイ役員補佐
近藤和正様

第8回日本編集制作大賞発表&授賞式

再度の歓談を挟んで、第8回日本編集制作大賞の発表と授賞式が行われました。まず部門賞の発表があり、その後グランプリの発表がありました。会場が緊張に包まれる中、審査委員長の澤崎眞彦先生より大賞受賞作として株式会社FBIコミュニケーションズ制作、UDトラックス株式会社発行、『Going the Extra Mile -UD Trucks Stories』が告げられ、会場からは大きな賞賛の拍手が沸き起こりました。各賞がそれぞれ受賞社に手渡された後、各審査委員からの講評がありました。

閉会の辞

今回の30周年記念事業実行委員会を代表して、会員社で第五代理事長の株式会社カルチャー・プロの須藤靖夫委員長が感謝の言葉を述べられました。須藤委員長によってその実行委員と理事会メンバーが壇上に呼び上げられ、参加者に対して各メンバーの紹介がありました。

最後は須藤委員長によって恒例の一本締めが行われ、30周年記念式典は無事幕を閉じることができました。講演をお引き受けいただいた嵐山光三郎先生、ご来賓各位をはじめ参加者の皆様、理事ならびに各実行委員の皆様、受付等々の仕事をお手伝いいただいた各会員社の社員の皆様に心より御礼申し上げます。

第8回日本編集制作大賞授賞作品

●日本編集制作大賞（グランプリ）
株式会社FBIコミュニケーションズ
『Going the Extra Mile - UD Trucks Stories』
●一般書部門賞
株式会社キャデック『世の中のふしぎ400』
●教材部門賞
株式会社ブランディット
『キッズレッスン　おふろシリーズ』
●企業出版部門賞
株式会社エディット『やさいだいすき』

●審査委員
【審査委員長 兼 教材部門】
日本教材学会
常任理事　澤崎眞彦 様
【一般書部門】
株式会社読書人
代表取締役社長　植田康夫 様
【企業出版部門】
江戸川大学メディアコミュニケーション学部
教授　濱田逸郎 様

（株）FBIコミュニケーションズ 福田社長

（左から）（株）エディット 小林社長、
（株）キャデック 藤盛氏、（株）ブランディット 西浦氏

澤崎眞彦先生

植田康夫先生

濱田逸郎先生

須藤靖夫委員長挨拶

理事会メンバーと実行委員

お花の御礼

当日の会場入口には立派な花輪が並び、30周年記念式典の華やかな場の雰囲気を盛り上げていました。御厚意に対し、心より御礼申し上げます。以下、花輪・スタンド花を頂戴しました方々の御名前をご紹介します。

日本ペンクラブ 会長　浅田次郎 様
日本書籍出版協会 専務理事　中町英樹 様
株式会社新学社 代表取締役会長　中井武文 様
株式会社実業之日本社 代表取締役社長　村山秀夫 様
当協会 賛助会員　大日本印刷株式会社 様
教材研 様

30周年記念式典実行委員会委員

株式会社カルチャー・プロ　須藤靖夫 委員長
株式会社アーク・コミュニケーションズ　檜森雅美 委員
株式会社アート工房　大坂日出男 委員
株式会社エディット　小林哲夫 委員
株式会社タカオ・アソシエイツ　髙雄宏政 委員
株式会社ロム・インターナショナル　外山操 委員

「編集の現場探訪」は今号お休みとさせていただきます。